

幸泉浩司

オペラ舞台監督

こいずみ ひろし●1982(昭和57)年、経営学部経営学科卒業。1960年生まれ。鹿児島県出身。卒業後、音楽関係の仕事をするうちにオペラに強い関心を持ち、(株)ザ・スタッフで舞台監督助手として勉強を始める。昭和62年、オペラ・スタッフを抱える(株)クリエイションの設立に参加し、舞台監督としての研鑽を積む。平成2年よりフリーとなり、現在は(株)アートクリエイション取締役社長。

常に反省する、
自分自身を向上させる。

中学生くらいの頃からクラシック音楽が好きで、本学在学中は専修大学フィルハーモニー管弦楽団に所属していました。卒業後は、浅草の楽器会社に就職。楽器の販売やメンテナンスの担当という仕事柄、劇場に出入りするようになり、オーケストラの人たちのおつきあひも生まれました。2年ほどして、制作のほうが面白そうだと、舞台監督の集団の会社に転職しました。入社するときに念をおされたのは、次の3つです。「手弁当でやらなければ駄目だ」「給料は少ない」「時間的にきつい」。いわゆる3Kの代表的な職業・職場でした。表面的には非常に美しく、華やかですが、裏で支えるのは厳しい条件・環境です。

舞台監督はどのような仕事をするのか、ご存知ない校友も多いかと思います。私も入社当時はそうでした。海外では違いますが、日本における舞台監督とは舞台の大道具・小道具、衣装、照明、音響、床山などの、多いときには数百人にもなる裏方スタッフのまとめ役的とお考えいただければ良いでしょう。

裏方スタッフは、多いときには数百人。
オペラの舞台を、みんなで支えています。

本学出身者には、異色の職業に就いている方も少なくない。オペラの舞台監督も、そのひとつではないだろうか。今年の7月から8月にかけて兵庫県と東京・渋谷の文化村で上演された、オペラ「キャンディード」の舞台監督・幸泉浩司さんに仕事の内容、オペラの魅力などについて、うかがった。

ひとつの仕事がスタートすると日々、極めて多忙になりますが、大切なのは「これでいい!」「うまくできた!」と思わないこと。「ああやって良かったのだろうか?」と、常に反省する、自分自身を向上させることを、自分のモットーとしています。そうした姿勢がないと、舞台の仕事は、すぐライバルに先を越されてしまいます。

この夏、オーチャードホールで上演した「キャンディード」の演出家は、世界で10本の指に入るほどの売れっ子です。そうした人と一緒に仕事することは、いわばダ・ヴィンチの「モナ・リザ」のような最高の絵画を見るのと同じことですから、願ってもないチャンスでした。

オペラを夫婦で、恋人と一緒に、
気軽に鑑賞してほしい。

今年は事業仕分けが話題になりましたが、日本のオペラもそうした予算削

減の影響を受けています。文化予算が切り捨てられるのは残念ですが、われわれも仕分けされても自立できる道を考えておかなければいけなかったし、お客様にアピールしたり、集客の努力をする必要があったという反省もあります。

「キャンディード」は東京の前に、兵庫県でも7回やりました。夜の公演は2回、あとは昼公演でした。観客は昼の時間に余裕のある比較的年配の女性を中心で、若い女性はあまり観に来ませんし、男性の観客が少ないという課題も抱えています。オペラというと、かしこまったり、堅苦しいというイメージを持たれているかもしれませんが、そういうものでは、まったくありません。オーケストラがいて、歌手がいます。舞台装置・衣裳・照明というように、いろいろな要素が盛り込まれています。

劇場とは、日常の生活と違う雰囲気味わったり、気分を高揚させることができる場です。大きな劇場で鑑賞した感動はやはり違いますし、オペラや音楽に詳しくなくても、その感動は伝わってくると思います。ぜひ一度、ご夫婦で、あるいは恋人、お仲間と一緒に、劇場へと足を運んでいただければと思います。(談)

「キャンディード」の
舞台

パリにあるシャトレ座が制作したプロダクションを、レンタルしてきたもの。「道具類はフランスから持ってきましたが、ハンドリングは全部われわれ日本側でやりました。今回の舞台は規模も大きく、公演回数も10回という回数をやりました。(8月、東京・渋谷の文化村オーチャードホールにて)

